

映画がシナリオをもとに作成されていくということは、言葉を元にしてイメージが作成されてゆくということであり、観客の仕事は、イメージから言葉を読みだすことです。ところが、映画のワンショットだけを取り出して見てみると映画を鑑賞した時とはまったく違った情報がそこにあることがわかります。ショットに分解されたイメージを編集することで、異った文脈を生成することも可能です。今回のワークショップでは、1951年に製作されたヒッチコックの「見知らぬ乗客」を分解しデータベース化し、入力された文章から映画を生成させるシステムを構築していきました。

Hitchcock Cooking

ヒッチコック・クッキング

元になるショットそれぞれへのアノテーション（ことば付け）作業も、学生各自の個性が反映されたものであり、また入力された文章も個人的な発想によるものです。元となるヒッチコックの素材の素晴らしさに支えられた作品ではありますが、元の映画のことを忘れて見てみた時には、想像もしなかったような、新たな物語をそこから読み出すことが可能です。是非、映画としてではなく、あらたな映像による物語への実験として見ていただけると幸いです。



映像創作論：藤幡正樹・北野圭介

システム構築：望月茂徳・大島登志一

展示作品制作メンバー：

森下誠也、三戸千尋、渡辺香志、館脇望

立命館大学映像学部
映像創作論成果発表展
2017.8.30 (Wed) 16:00-17:00
立命館大学衣笠キャンパス
充光館 1F 学生ラウンジ